

九州派は前進する 桜井考身

日本で一人前の画家と呼ばれるためには東京、南の両画廊で個展をするか、毎日国際展で連続入賞してビエンナーレ代表に選ばれることしか道はない。勿論、田舎において一人で絵を描いている立派な画家もいるとは思いますが、そんな画家でピエンナーレに選ばれた人も、その可能性のある人物も、私は不幸にして知らない。たしかに坂本繁二郎のように田舎で仕事している人もいる。しかし、彼とて例外ではない。やはり彼はパリへ行き、東京で仕事した経験がある。浜田にしてもしかり。そんな単純なことから言えば南、東京クラスの画廊は全米で五十ぐらいある。五十をまわれば、力がありさえすれば一つぐらい見つけ出すことは容易なことだ。日本での二店では機会がないことの方が先で、力もへったくれもあつたものじゃない。コンクールの一、二点で出て来る人もあるが、それでは、やはり判らないのが当然だ。それ故、一、二度入賞したとしても見てもらう機会の多い東京在住作家の方が有利になるのは当然の理だ。そのためには個展しかない。東京画廊と南画廊のただ二つだ。

あなたは、この二つの画廊をとる自信があるのか、あれば、ワザワザアメリカまで行く必要はない。だからといって、これは本質でも真に作家になる道でもない。結果的にそうなれば良いぐらいにしか私自身は思っていない。では作家とはなにか。答えは困難だ。でも自分自身の感動を最高に生きること。その結果としての再現、シンボリック、表現手段としてのテクニク……、はてはスレスレの生活態度などいろいろあるだろう。要は対社会の手段をとるにしても、個性の創造という、きわめて平凡な目的しかないように思われるが、その実現手段となると多様で、その手段そのものが目的と化す場合もあることは確かであり、目的と化さねばならないと私は信じている。例えばゲバラの目的はゲリラでなく革命、いや革命でもなく人民が人民の当然の生活するという極く平凡なことの實現でしかない。しかし、その実現手段となると多様であり、あたかもゲリラがすべての目標のように見えてくる。しかしゲリラを行う時は、それが彼であり、また彼のすべてとならなければ、死をもって、おぎなうことは出来ないように私は考える。手近なところからゆこう。地方コンプレックスを壊せといい、ゲリラのすすめと針生一郎は書いているが、何処にゲリラを進めてゆくのか、なにのために？……。

サンフランシスコにいて一番幸福に感じたのは外人の女を抱いたことではなく絵が売れたことでもない、ましてや画廊で展覧会が出来たことでもない。一番幸福であったのは、ユニークな文化が生まれるのにはじめから参加しているというよろこびと、それがどう変化してゆくかというときだ。勿論、私の画家としての基準は九州で育てら

れたものであるが福岡に対する東京と同様、サンフランシスコに対するニューヨークという場合、異様に思えた。例えば私が最初に住んでいたブッシュ通りに、画家の友人が十二、三人いたのが、その中の九人までもがニューヨークから来たものであり、その中の一人はニューヨークのアートスクールで川島氏と一緒に勉強したことがあるとニューヨークから川島氏のポスターが送って来て判ったというような現象が数多くある。こういうことが福岡で考えられるだろうか。

確かに現在は考えられない。色々の違いがあり、色々の困難なことはあると思うが、いまこそ、その可能性に向かって我々は力を合わせて進めて行くべきだと思う。その第一歩が、世界各国に出てゆき国際的活躍を、そのまま福岡に持ち帰り、自信をもって福岡を風俗化してゆく。それはあたかもメキシコ絵画が全世界を風ビしたように。ヒッピーはビートニックの子供であるが、ギンズバーグ、シュナイダーなど、彼等はよく世界を旅行する。そして世界各国の体験談を時間をかけてサンフランシスコで討議する。『人間の真の幸福とはなにか』宗教、芸術、政治などすべてをふくめて徹底的にやる。そして、各人が、それぞれ同人雑誌で発表する。私も連中をマネという意味もあるが、福森氏の要請で『記録と芸術』という小さな同人雑誌にピート詩人の詩の紹介と東方見聞記（アメリカで革命は可能か）というタイトルで原稿用紙三十枚を書き、こんど帰って来る時も詩人の詩を持って来た、と同時に同人雑誌、詩集を福森氏の所へとどけた。私は画家であるにもかかわらず詩人との交流は困難であり、時としてはわずらわしくもあったが結果としてはよかったと考えている。ということは、ただ単に外国に行くということがいいことでは決してないように、ただ単にあなたが福岡にいるということが地方でグリラをすすめていることでは決してないということをお願いしたい。

サンフランシスコの今度の文化の特色は音楽文化とよばれる所のものであるが、その原点というか要となっているのは芸術を理解し育てる『ファミリ・ドック』というマネジメントグループです。そして、今度帰国してビックリしたのは今迄の記者には決してみられなかった型の深野・谷口という二人の記者が菊畑という芸術家とのマネジメント的なことを企画し実行しているということだ。動向展の作品を批評することと別に、私が動向展に驚いたことは、地方作家の欲望がドス黒くヨドンだ驚くべき大量のエネルギーが動向展へ向かって爆発したということ。これは誠に、どの展覧会にもなかった特色であり、このエネルギーをいまこそ未来の方向に向けて正確に、もし、その道を誤らなければ、前述したよう、日本でははじめての地方都市から、ユニークな文化が生まれよう。隣も前もというように東京から音楽家が、画家がサンフランシスコのように集ってくる。これは非常に楽天的考察にしか過ぎないことは百も承知だが、ハンデギャップを負う現代の作家は、やはり、この辺から切りくずしてゆく

よりほかに手はあるまい。そのための提案と実行プランをいま九州派は練っている。今年中につきつぎと我々は実行してゆくつもりであるが、その基底となる、マネジメント・グループを強力に推し進める必要がある。そのためには手段で争うことの愚をさげ、明確な目標のもと例えば福岡のサンフランシスコ的文化的文化誕生とでもいうものを明確にして多様な手段と、多様な人物を駆使して、その目的達成に努力するならば、これこそゲリラ戦術であり、必ず日本で始めて全世界に流行する芸術、音楽、美術、いや人生のいき方、それは風俗であるかも知れないが発生することが確信される。九州派は作家の側から徹底的に、のゲリラ戦に参加するものである。こういう意味からも各グループ、例えば小松、舟木、小谷、上田など作家は、もう一まわり大きくなって欲しいと同時に国際的視野も広げてもらいたいと同時に、谷口、米倉といった作家であると同時にオルガナイザー的大人物が手を固く結んで田中、谷口、深野といった連中とマネジメント・ループを形成して欲しいと要望するとともにサンフランシスコと激しく交流することによって一つの風俗を生むことをサンフランシスコで得た体験として提案したい。